

保健管理センターと私

Looking back on the days in Keio and health center

齊藤 郁夫

はじめに

1964年の東京オリンピック開催，さらに新幹線，高速道路の開通と日本は荒廃から20年で復興していった。しかし，東西冷戦は激化し，人工衛星などソ連の科学技術発展がすばらしく見え，政治に対する学生運動のエネルギーも高く，医学部生，若手医師の間では医局制度，卒後研修のあり方が問題となっていた。

全国の大学保健管理センターの設立

学生の不満，不安などからくる政治的運動へのエネルギーの軽減も目的の一部と思われるが，多くの大学で保健管理センターが作られ，それらの情報交換の場が作られた。全国大学保健管理協会創立25年記念特集号（1988）によると1964年に第1回の全国大学保健管理研究集会が開催された。私立大学では同志社大学，早稲田大学などが初期から参加していた。慶應義塾大学の参加は遅れたが，1998年にパシフィコ横浜での全国大学保健管理研究集会を主催し，私は2005年から理事会の一員となり，その後の所長の河邊博史先生，森正明先生が理事として活躍している。

慶應義塾の医務部，保健管理室

福翁自伝の王政維新の部分にアメリカ留学から戻った精神不調の塾生を新銭座の塾の部屋で休養させて，見守ったとの記録がある。これが塾内の医務室（医務部と呼んでいた）の始まりと思われる。1938年には校医制度，1949年に医務室規程ができています。医務室の担当医師には1947年石田二郎先生（内科教授），1959年三辺謙先生（その後医学部長）などの名前がある。1969年から名称が保健管理室となり加藤映一先生（その後慶應義塾看護短大学長）が室長となった。（慶應義塾大学保健管理センター年報，2017）。

慶應義塾大学保健管理センターの設立

内科医局は慶應義塾の三田キャンパス，付属の一貫校の医務室に若手医師を学校医として派遣していた。しかし，企業の医務室より給料が低く希望者は少なく，医局の力の低下もあり，派遣医師のみで学校医を維持することは困難となっていった。1970年ごろ内科医局幹事とし医師派遣を担当し，塾内への派遣の仕切りもしていた関原敏郎先生（1929-2013）は1971年秋ごろに専任医師を増やした新しい保健管理の組織の運営に当たるように三田の本部から要請された（ご本人は想定外だったとのことである）。1972年4月に保健管理室から発展し保健管理センターが設立され，初代所長は常任理事三雲夏生先生，医師の専任大学教員は増田義徳教授（公衆衛生），関原敏郎助教授（内科），

岩佐政子講師（内科）、井上清講師（小児科）であった（関原敏郎，内科学教室と私，慶應義塾大学医学部内科学教室88年史，2008）。その後，所長となった関原先生は約20年間にわたり，その直前に病院から保健管理室の看護部門トップとして異動していた林公代さん（1935-1994）とともに保健管理センターの発展に貢献した。（荒井綾子：林公代さん追悼文集，1996）

一貫校時代

1947年生まれの際は1年間，毎週日曜日に日本進学教室に通い，1960年に慶應義塾中等部に入学した。小学校は品川区五反田の上皇後の実家の近くにあり，合唱の盛んなところだった。私も6年生の時に一員として日本放送のコンクールで優勝したことがあり，バイオリン部門では慶應義塾中等部1年の佐藤野百合さんが優勝した。ピアニストの中村紘子さんは中等部の4年上で，慶應高校時代に演奏会の後中等部の後輩だといってサインをもらいに行ったことがある。中等部3年生の時にNHK交響楽団の定期会員になった。初めての演奏会でフルネの指揮でラヴェルのスペイン狂詩曲を聞き，いつの日かグラナダに行ってみたいと思い2019年に実現した。中等部の音楽の授業で聞いたベートーベンのハイリゲンシュタットの遺書のことが記憶に残り，10年ほど前のウーンでの学会の時に訪れ，エロイカガッセなどを歩いた。慶應高校の倉庫には1期生から健診の紙の記録がすべて残っており，高校1年の私の記録をみると169.6cm，56kg（現在と同じ）である。雨の日の体育は保健の講義となり，先生がスウェーデン体操は女性の体格の向上に役立つと言っていた。義理の息子マティアスはスウェーデン人なのだが，スウェーデン体操をしらないようである。孫のリサは体の前後幅が広く，日本人との体型の差は体質的なものかなと思っている。

医学部からアメリカへ

大学入学時の私の健診記録のプリントアウトもたまたま保存されており，171.0cm，68kgだった。信濃町の保健室で，永野志朗先生（1930-2010）に薬をもらったこともあった。1972年に卒業した。2年間の慶應病院内科研修医の後，2年間平塚市民病院に出張したが，専門領域はアメリカ留学帰りの猿田享男先生（その後医学部長，常任理事）の指導のもと高血圧と決めていた。その後，慶應病院内科に戻り2年間で「各種アンギオテンシンアナログに関する臨床的ならびに実験的研究」（慶応医学1978：55：257）という博士論文を作成した。1978年7月にアメリカの高血圧研究の中心であったオハイオ州クリーブランドに留学した。結婚して間もない溶子とともに心細く，羽田空港を出発，まずサンフランシスコに到着した。大学のマンドリンクラブの同期小林君のユニオンスクエアの店を訪問し歓迎されほっとした。所属したクリーブランドクリニック研究所は所長のバンパス先生はアメリカ出身だが，室長のブラボ先生はフィリピン出身，研究室の医師の同僚はノルウェー出身のオンビック，イタリア出身のフィオレンティーニ，エジプト出身のフォード，ポーランド出身のゴッコウスキ，ブラジル出身のサラゴサとインターナショナルな環境だった。アルドステロンの分泌調節の研究を行い，2年目にはダラス，サンフランシスコ，ニューオーリンズ，ロスアンゼルス，ワシントンなどの学会に行かせてもらい発表した。日没の遅い夏の夕方には帰宅後，毎日近くの公園で妻に習いながらテニスを始めた。9月になりクリーブランドオーケストラの定期会員になり，初めて行った演奏会はマゼール指揮でマーラーの交響曲第5番だった。研究テーマのレニン・アンジオテンシン・

アルドステロンの阻害薬であるACE阻害薬、ARBは必須の降圧薬となり、また、2000年以來4-5年毎に改定されている日本の高血圧治療ガイドラインの作成、全国300か所の医師会や台北、上海、バンコックなどでの講演、米国MSD本社のアジアAIIボードの委員としてアセアン諸国、中国、香港、台湾、韓国、ニュージーランド、米国の医師との10年間の交流の機会を与えてくれた。

保健管理センター

1980年7月に帰国、1981年4月から保健管理センター専任講師となり、1995年10月、永野先生の後任として所長となった。保健管理センター担当常任理事は植村恭夫先生、猿田先生などであったが、数件の問題発生時以外は報告、相談することなく自由に運営を任された。

慶應義塾大学の保健管理センターの特徴として健康管理、産業保健に加え、臨床、研究を行う点がある。最後に企画した研究では高血圧の大学生が自分の食塩摂取量を認知し、減塩することの実行可能性と血圧への影響をみた。随時尿法（尿中のナトリウム、クレアチニンを測定し計算式から1日の食塩摂取量を川崎の式で推定する）を用いた。呼びかけに応じた学生に尿検査の意義を説明し同意を得て、2011年12月に1回目の尿検査、2012年1月に2回目の尿検査を行い、その際1回目の結果に基づき減塩の食事指導を行い、2012年3月に3回目の尿検査を行った。2012年4月には健診で血圧を測定した。106人が参加したが、平均の食塩摂取量は1回目9.8g/日、2回目9.5g/日であった。3回目は8.2g/日に低下（ $p < 0.0001$ ）、血圧は150/82から143/78mmHgに低下した（ $p < 0.001$ ）。参加しなかった28人では血圧は変化しなかった（CAMPUS HEALTH 2013；50：63）。林公代さんなどスタッフのサポートを受けて行った研究は169の英文を含む多数の論文となり、「高血圧の成因と治療の研究を振り返って」(慶應保健研究2012；30：1)にまとめた。研究について保健管理センターの同僚医師だけではなく、幅広いメンバーによる審査が必要な時代となり、2007年に日吉に研究倫理審査委員会を作ることを提案し、2008年にはその委員長に就任した。

多接

2020年から日本生活習慣病予防協会の理事になったが、望ましい生活習慣の一つとして人との接触を多くすること（多接）を推奨している。福沢諭吉先生は人間交際じんかんこうさいを盛んにすることを勧めていた。2013年の退職後も保健管理センターの忘年会には参加させてもらって若手から刺激をうけている。コロナワクチンの大規模接種の中心を保健管理センターのスタッフがにない、2021年6月21日から約2か月で計98,026人の接種を行ったことは快挙である（北川雄光：三田評論2021；1260：106）。キャノンの健康支援室（私は関原先生の後任として就任）で週1回会う慈恵医大臨床薬理出身の景山茂先生（キャノン診療所所長、キャノン職域大規模接種の責任医師）にも称賛されている。1993年にラジオ日経の医学対談番組である杏林シンポジアの編集委員となり、現在も国立国際医療センター名誉院長の大西真先生とそれぞれ月に2回のペースで様々な領域の医師と対談している。最近はオンライン診療、高血圧・糖尿病の重症化予防、職域精神保健などがテーマとなっており、パソコンでいつでも聞くことができる。2018年からは医学部内科同窓会の監事になり、同窓会の活性化のために役立つアドバイスができればよいと思っている。医学部・三四会による医師生涯教育講演会にもこの20年ほど出席するようにしており、コロナ禍以前は終了後のパーティーでは協賛会社の1つである中外製薬の

永山治会長とお話ししていた。三田の評議員会で出会い、慶應高校の同期であることを知って以来であるが、業績の良い会社のトップはさすがだといつも感じる。

おわりに

長文となってしまったが、ベートーベンの皇帝をツイーマン、ラトル、ロンドン交響楽団で、モーツァルトのピアノソナタをアルゲリッチ、バレンボイムで、ホロビッツのモスクワでの1986年の公演、ブルックナーの第7番をハイティンク、ウイーンフィルのビデオを見ながらこの原稿を書いている。結婚44年になる妻、溶子に「至福の時ね」といわれた。今でも二人とも週2回、同年代の人たちとテニスを楽しんでいる。ありがたいことである。今回、この貴重な機会を与えてくれた編集委員長広瀬寛先生に感謝している。